

令和 4 年 6 月 1 日現在

機関番号：32607

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K23205

研究課題名（和文）心不全患者の症状の知覚、評価、対処行動に対する看護支援プログラムの開発と検証

研究課題名（英文）Development and effectiveness of a nursing support program for the symptom perception, evaluation, and coping behaviors of heart failure patients

研究代表者

岡田 明子 (Okada, Akiko)

北里大学・看護学部・助教

研究者番号：60874485

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では心不全患者の症状の知覚、評価、対処行動の実態を明らかにすることで、症状マネジメント向上に必要な看護支援について示唆を得ることができた。1つ目の研究では急性増悪時の症状の体験を明らかにするために、インタビューデータをテキストマイニングを用いて分析した。患者が急性増悪時に体験した症状は必ずしも医療者が用いる用語では語られず多様な表現が用いられていた。患者の体験に近い表現を用いて症状に関する教育を行うことの重要性が示された。2つ目の研究では心不全セルフケア尺度を用いて症状マネジメントの実態調査を行った。その結果、体重や症状が変化した場合の評価方法に関する指導の必要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの心不全患者における急性増悪時の症状に関する研究は、医療者が用いる用語で患者の体験を捉えようとしていた。それに対し、今回の研究において患者の体験を患者による表現をそのまま用い、症状の体験の全体像を示したことで、患者の体験そのものを医療者が理解することができ、症状のイメージをすり合わせるができる。今回の結果を臨床現場で行われている症状マネジメントに関する教育に活用することにより、患者の症状マネジメント改善の一助となる。また、今回開発した心不全セルフケア尺度は、心不全患者における症状マネジメントを包括的に評価できる尺度であり、患者のセルフケア向上に役立てることができる。

研究成果の概要（英文）：This study was designed to clarify the perception, evaluation, and coping behaviors of symptoms in heart failure patients, and to provide suggestions for nursing support needed to improve symptom management.

In the first study, interview data were analyzed using text mining to clarify the experience of symptoms during acute exacerbations. The symptoms experienced by patients during acute exacerbations were not always described in the terms used by healthcare providers, but a variety of expressions were used. The second study investigated symptom management using the Self-Care of Heart Failure Index. The results indicated the need for guidance on how to assess weight and symptoms when they change.

研究分野：心不全

キーワード：心不全 症状マネジメント セルフケア

1. 研究開始当初の背景

心不全は、急性増悪による入退院を繰り返す特徴を持つ。急性増悪時は呼吸困難や浮腫などの症状が出現し徐々に重症化するため、症状の出現は急性増悪に気づく目安となる。急性増悪時の治療の遅れは、死亡や入院期間の長期化に繋がる。患者が急性増悪時に早期に治療を受けるには、患者自身が症状を早期に知覚、原因を正確に評価し、直ちに受診などの対処行動を取る必要がある。しかし、欧米における先行研究において、患者は重症化するまで症状を知覚しない、症状の正確な評価が困難、症状の知覚後に直ちに受診をしない実態が明らかとなっており、症状の知覚、評価、対処行動を改善するための看護支援が求められている。このような背景を踏まえ、欧米では症状の知覚、評価、対処行動の改善を目的とした効果的な看護介入方法の構築に関する研究が多数実施されている。一方で、わが国の心不全患者における実態は十分に明らかにされておらず、必要な看護支援についても明らかにされていない。症状の知覚、評価、対処行動を含む症状マネジメントには文化や価値観、医療体制の違いなどが影響することから、日本の心不全患者における症状の知覚、評価、対処行動の実態を明らかにし、日本の患者の症状の特徴や患者の特性を考慮した看護支援プログラムの構築が求められている。

2. 研究の目的

本研究では、心不全患者における急性増悪時の症状の知覚、評価、対処行動の実態を明らかにするために、インタビューによる調査研究を行う。また、わが国の心不全患者における症状の知覚、評価、対処行動の実態を量的に調査することができる質問紙の日本語版を開発し、その質問紙を用いて調査を行うことで実態を明らかにする。これらの研究結果を踏まえ、症状の知覚、評価、対処行動を改善するための看護介入プログラムを開発し、その実施可能性を検証する。

3. 研究の方法

心不全の急性増悪で入院中の患者を対象に、入院前に気づいた症状に関するインタビュー調査を行い、テキストマイニングによる内容分析を行った。

米国で開発された心不全患者のセルフケアの評価尺度である Self-Care of Heart Failure Index ver.7.2 の日本語版を開発した。

開発した質問紙を用いて、心不全患者における症状の知覚、評価、対処行動の実態を明らかにした。

4. 研究成果

心不全の急性増悪時における患者の体験と、体験を表現する際に用いるキーワードを明らかにするために、21名の患者にインタビューを行いテキストマイニングによる内容分析を行った。その結果、患者が体験した症状は、心不全の典型的な症状である「労作時息切れ」「運動耐容能の低下」「倦怠感」「発作性夜間呼吸困難」「頻尿」「喀痰の増加」「体重増加」に分類することができたが、これらの症状を説明する際に用いる表現は多様であった。また、具体的な症状として表現することができない曖昧な体調の変化を体験したことを語った患者も存在した。患者が体験した症状と医療者が用いる症状名は必ずしも一致するとは限らず、どちらの症状名にも区別をすることができないような症状を体験している場合もある。心不全患者の症状の認識を改善するためには、患者がイメージする症状と医療者がイメージする症状を一致させることが重要

であり、患者の症状の体験を患者教育に活用することの重要性が示唆された。本研究の結果は、臨床現場における症状の知覚、評価、対処行動の改善に向けた看護支援に役立てることができる。

心不全患者における症状の知覚、評価、対処行動を評価することができる質問紙である「Self-Care of Heart Failure Index ver.7.2」の日本語版を開発した。開発に際しては、原版の開発者である Barbara Riegel 氏による許諾を得た後、翻訳および逆翻訳、心不全看護の専門家および研究者とのディスカッションを複数回繰り返し、最終の逆翻訳版については開発者ともディスカッションを行い、選択肢の表現などの修正を行った後に合意を得た。開発した日本語版について、7名の心不全看護の専門家および研究者と10名の心不全患者に対し質問紙の内容に関する認知的インタビューを行い、内容の適切性、網羅性、理解のしやすさを調査した。インタビューの結果から、修正が必要な箇所を修正をした後に最終の日本語版とした。臨床現場において、今回開発した尺度を用いて患者の症状マネジメントの状況を継続的に評価することにより、症状マネジメントが不十分な患者を明らかにし、必要な支援に繋げることが可能となる。

心不全患者における症状の知覚、評価、対処行動の実態を明らかにするために、Self-Care of Heart Failure Index ver.7.2日本語版を用いて、314名の患者に調査を行った。調査の結果、症状の知覚および評価について、多くの患者が実施できていた項目は「毎日の体重測定」「体調の変化に注意を払うこと」であった。一方、実施できていなかった項目は「症状の変化に早期に気づくこと」「症状の原因が心不全によるものであると評価すること」であった。症状への対処行動について、多くの患者が実施できていた項目は、症状に気づいた時に「薬を飲むこと」「体調が良くなるまで活動を制限すること」であり、実施できていなかった項目は「飲水量を減らすこと」「家族や友人に助言を求めること」であった。これらの結果から、症状の知覚及び評価については、心不全患者に対して一般的に教育が行われている毎日の体重測定や症状の観察は行っているものの、症状の変化に気づくことや症状の原因を評価することが不十分な実態が明らかとなった。心不全症状は加齢による変化や呼吸器疾患などの併存疾患と症状が類似していることから、心不全患者は気づいた身体の変化を病気を示唆する症状として捉えることが難しい場合がある。患者教育の際は、症状を観察するよう指導するのみではなく、症状の観察方法や観察した症状の評価方法についても指導を行う必要があることが示された。症状への対処行動については、他者に助言を求めることに関する項目の得点が低かった。他者からの助言が急性増悪時の早期の受診に繋がる場合があるため、症状に気づいた時は家族や医療者など他者に助言を求めることや、患者のみでなく家族など介護者も一緒に症状を観察することの重要性を指導し、実践に繋げることが求められる。

本研究では、これらの研究結果を踏まえ看護支援プログラムを構築し、効果検証までを実施する予定であったが、コロナウイルス感染症拡大の影響により調査に時間を要し実態を明らかにするまでに留まった。しかしながら、本研究の結果から臨床現場における症状の知覚、評価、対処行動を改善するために必要な支援について示唆を得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Okada Akiko, Tsuchihashi-Makaya Miyuki, Nagao Noriko, Ochiai Ryota	4. 巻 Publish Ahead of Print
2. 論文標題 Somatic Changes Perceived by Patients With Heart Failure During Acute Exacerbation	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Cardiovascular Nursing	6. 最初と最後の頁 00-00
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1097/JCN.0000000000000915	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Okada Akiko, Tsuchihashi-Makaya Miyuki, Nagao Noriko, Ochiai Ryota
2. 発表標題 Somatic Changes Perceived by Patients With Heart Failure During Acute Exacerbation
3. 学会等名 Euro heart care（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------